

〔論文〕

領域「表現」のルーブリック作成に関する研究 ——保育内容演習（表現・音楽）における学生の自己評価の結果から——

横 井 志 保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

保育内容演習（表現・音楽）の授業において履修者にルーブリックを基にした自己評価を実施した。その結果、「表現」の保育において大切にされている、日常生活における様々な事象から感じ取る気持ちを友達や教師と共有し、表現し合うことを通して豊かな感性を養うことや、表現の手段の特性を生かした方法で表現できるようにすること、自分の気持ちを一番適切に表現する方法を選ぶことができるように様々な表現の方法を子どもに経験させることができるような保育者の養成が必要であることが示唆された。そのためには、ルーブリックの評価の観点に他の人の表現を受容する態度に関する項目が必要であること。また、音楽に係る技術に偏ることなく、子どもと共に行う活動のイメージを持つことができるような授業展開と共にその評価の観点が求められることが明らかとなった。また、実習経験の有無にかかわらず自己評価できる評価の観点を加える必要があることが示唆された。

キーワード：ルーブリック，保育内容演習（表現・音楽），学生の自己評価，幼稚園教育要領

Research on creating a rubric for the Domain of 'Expression':

Based on students' self-assessment results in Childcare content practice (Expression, music)

Shiho YOKOI

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

1. 問題の所在

大学教育における成績評価はこれまで、教員の裁量に依存し組織的な取組がなされてこなかったと2008年の中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」(答申)¹⁾により指摘され、学修成果に関する評価の仕方の転換を求められている。学生の能動的な学びをいかに評価するのか。従来通りの試験方法では可視化されにくいパフォーマンスの評価方法として、学習者の達成度を示すための基準であるルーブリックが注目をされるようになった。

これまで保育者養成においては、音楽の技能に関するルーブリックの研究は行われているが、保育をイメージし、保育そのものに焦点を当てた表現(音楽)に係るルーブリックの研究はされていない²⁾³⁾。

そこで本研究では、領域「表現」の保育を理解した上で、実践できる保育者の育成を目指すことが可能な授業内容と、評価の可視化により学生の学びの深まりを助けるルーブリックのあり方を検討することを目的とする。

2. 領域「表現」の保育とは

領域「表現」は1989(平成元)年に幼稚園教育要領が改訂され、それまで6領域であった「健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作」から5領域の「健康・人間関係・環境・言葉・表現」となり、誕生した。黒川は翌年出版された表現のテキストの中で、保育者が子どもたちの言動や状態から子どもたちの気持ちを読み取り、それらの表現に働きかけながら保育をしているにもかかわらず、表現にかかわる保育としてこれまで考えられてこなかったと述べている。また、表現という視点が明確には設定されてこなかったが、領域「表現」が誕生し、新たにその視点を示すことは保育全体を見直すことにつながると言う⁴⁾。そして、「子どもたちの活動や状態を表現として受け止めること」「表現の自覚を伴っていない活動や状態、あるいは表現を最終的な目的にはしていない活動や状態、そうした子どもたちの活動や状態から気持ちの表れをくみ取ること」「できればなどにこだわらず、感じ考えたことを、その子なりの表し行為として受け止め、その内容でできるかぎり適切に読み取ること」が保育の場で求められる大切なことであると述べている⁵⁾。また、分野単位で専門的な視点での成果を求めて技術指導に偏りがちだった保育実践を、子どもたちの期待や意欲といった表現という側面から目を向けることで子どもたちの感じ考える心を豊かに育てる表現の保育へとつながると述べている⁶⁾。

3法令が同時に改訂(定)された翌年の2018(平成30)年に発行された幼稚園教育要領解説の領域「表現」には、幼稚園においては日常生活における様々な事象から感じ取る気持ちを友達や教師と共有し、表現し合うことを通して豊かな感性を養うこと。また、表現の手段の特性を生かした方法で表現できるようにすることや自分の気持ちを一番適切に表現する方法を選ぶことができるように、様々な表現の方法を子どもに経験させることが大切であると解説されている⁷⁾。

3. 研究方法

2023年度秋学期開講の「保育内容演習（表現・音楽）」の履修者9名を対象に、ルーブリックを基にした自己評価を最終回（15週目）に実施した。それら履修者の自己評価の結果から、領域「表現」におけるルーブリックのあり方について検討した。

自己評価票はルーブリックを基に作成した。それぞれの詳しい評価の内容はルーブリックを読みながら評価の高い順に5段階で自己評価し、記入することとした。また、自由記述欄を最後に設けた。ルーブリックと評価票は表1～3の通りである。

表1. 保育内容演習（表現・音楽）ルーブリック

学修到達 目標と評価項目	評価	到達目標を 大きく上回る	到達目標を 十分に達成	到達目標を達成	到達目標を達成す るにはやや 努力を要する	到達目標を達成す るには相当の努力 を要する
	幼児期の表現活動の意義を理解し、感性と表現を育てる保育のあり方、方法について模擬保育を通して、実践のための基礎的な技能を養う。	読譜	楽譜に書かれている通りに歌やピアノで再現するだけでなく、自分なりの解釈を加えることができる。	楽譜に書かれている通りに歌やピアノで再現することができる。	間違えずに音を読むことができ、音楽用語も理解している。	音は読めるが音楽用語はわからない。
演奏		楽譜に書かれている通りに歌やピアノで再現するだけでなく、自分なりの解釈を加えて演奏することができる。	楽譜に書かれている通りに歌ったりピアノ等で再現することができる。	間違えることなく楽譜に書かれた音をピアノ等で演奏することができる。	間違えるが楽譜通りにピアノ等の楽器で演奏することができる。	楽譜通りにピアノ等の楽器で演奏することができない。
弾き歌い		曲に表情をつけて子供と共に歌う様に弾き歌いすることができる。	子供と共に歌う様に弾き歌いすることができる。	最後まで止まることなく弾き歌いすることができる。	途中で止まることがあるが、最後まで弾き歌いすることができる。	歌いながら弾くことができない。
等表現活動の意義の理解		保育内容や方法に関する高度な知識や技能を習得し、内容領域の関連性を理解した実践ができる。	保育内容や方法に関する知識や技能を習得し、子供の反応を十分に予想した実践ができる。	保育内容や方法に関する知識や技能を習得し、実践できる。	保育内容や方法に関し、一定の知識や技能を習得しようとしている。	保育内容や方法に関し、一定の知識や技能を習得していない。
保育者として求められる実践内容や方法に関する知識や技能を基に、他者に伝える力を身につけている。	表現力	伝えなければならないことを自分なりに工夫して適切な方法で伝えることができる。	伝えなければならないことを自分なりの方法で工夫して伝えることができる。	伝えなければならないことを伝えることができる。	伝えなければならないことを伝えようとするが、十分に伝えることができない。	伝えなければならないことを伝えることができない。
	他者に伝える力	自ら保育内容や方法に関する問題を発見・提起し、それに関する情報をICTを用いて収集・分析し、解決策を立案し、他者に適切な方法で伝えることができる。	自ら保育内容や方法に関する問題を発見・提起し、それに関する情報をICTを用いて収集・分析し、解決策を立案した上で、他者に伝える力を身につけている。	自ら保育内容や方法に関する問題を発見・提起し、それに関する情報をICTを用いて収集・分析し、解決策を立案できる力を身につけている。	与えられる知識や技能を自分なりに検討し、保育内容や方法に関する課題に対する解決策を立案する力を身につけている。	与えられる知識や技能を自分なりに検討し、保育内容や方法に関する課題に対する解決策を立案する力を身につけていない。

表2. 自己評価票

学習到達目標	評価項目	評価
幼児期の表現活動の意義を理解し、感性と表現を育てる保育のあり方、方法について模擬保育を通して、実践のための基礎的な技能を養う。	読譜	
	演奏	
	弾き歌い	
	表現活動の意義等の理解	
保育者として求められる実践内容や方法に関する知識や技能を基に、他者に伝える力を身につけている。	表現力	
	他者に伝える力	

表3. 評価の尺度

評価の尺度	点数
到達目標を大きく上回る	5点
到達目標を十分に達成	4点
到達目標を達成	3点
到達目標を達成するにはやや努力を要する	2点
到達目標を達成するには相当の努力を要する	1点

《保育内容演習（表現・音楽）について》

履修生に配付したシラバスに示した授業の到達目標は以下の通りである。

<p>本授業では、音楽的な表現の保育を支える保育者となるために、身に付け、学んで欲しい事として、以下の2点の学習到達目標を掲げている。</p> <p>a. 幼児期の表現活動の意義を理解し、感性と表現を育てる保育のあり方、方法について模擬保育を通して実践のための基礎的な技能を養う。</p> <p>b. 保育者として求められる実践内容や方法に関する知識や技能を基に、他者に伝える力を身に付けている。</p>
--

授業内容は表4に示した。

表4. 講義テーマ一覧

回数	テーマ
1	子供の音楽表現とは
2	子供と歌う日常生活の歌「朝のうた」を弾き歌いする
3	子供と歌う日常生活の歌「おべんとう」を弾き歌いする
4	子供と歌う日常生活の歌「おかえりのうた」を弾き歌いする
5	子供と歌う「ドレミの歌」を弾き歌いする
6	模擬保育と評価【子供の音楽表現 (1)】歌う
7	和太鼓「たいこばやし」
8	ブームワッカー「きらきら星」
9	模擬保育と評価【子供の音楽表現 (2)】動きと音
10	ウクレレ「Slow & easy」
11	ミュージックベル「きよしこの夜」
12	模擬保育と評価【子供の音楽表現 (3)】楽器を奏する
13	オペレッタとは
14	オペラ鑑賞「セロ弾きのゴーシュ」
15	まとめ

授業の主な内容は、表4の通りピアノの弾き歌い、和太鼓、ブームワッカー、ウクレレ、ミュージックベルと、主に楽器を演奏することであった。他には楽器の演奏を行うだけでなく、子どもと共に行う場合、どのように活動することができるのか、模擬保育という形で試したりした。

4. 倫理的配慮

研究に協力してもらった履修生には、研究の趣旨と方法、個人情報とプライバシーの保護、研究協力への自由意思と協力の撤回の自由について説明し、自己評価票を提出することで了承したものとして同意を得た。

5. 結果と考察

表5. 自己評価の結果

(1) 自己評価の結果

自己評価は第15回の授業終了後、本学独自のCCS（キャンパスコミュニケーションサービス）を使用して、シラバスとルーブリックを提示し、それを基に回答をしてもらった。自己

評価の観点	各履修者の自己評価						
	A	B	C	D	E	F	G
読譜	5	1	4	2	3	3	4
演奏	3	2	3	3	3	3	4
弾き歌い	2	2	2	3	3	3	5
表現活動の意義等の理解	3	2	3	2	4	3	4
表現力	3	3	2	4	3	3	5
他者に伝える力	3	2	1	3	4	3	5

評価はCCSにて提出してもらった。履修者9名中7名の回答を得た。回答の結果は以下表5に示した。履修者ABは3年生、CDEFGは4年生である。

(2) 実習経験による評価の仕方の違い

履修者ABCDは「1. 到達目標を達成するには相当の努力を要する」から「5. 到達目標を大きく上回る」まで幅広く自己評価している。対して履修者EFGは「3. 到達目標を達成」以上と、いずれも高く自己を評価をしている。

履修者ABCDは教育実習（幼稚園）4週を終えてから本自己評価を行っている。自己評価の結果から、実習という実体験が、自己評価に影響を与えたことがわかった。それは、自由記述に書かれているA：「実際幼稚園実習に行ってみて、分かった事ですが、先生がピアノを弾くことが何かをする合図になっていたり、今までまとまっていなかった子ども達が集まるようになったりとピアノが持つ力の重要性に気づきました。」と、いう直接的な記述やD：「楽器はピアノだけでなく様々な楽器があり、その楽器における表現方法や楽しみ方・遊び方を考えたりすることによって、感性が育まれると感じたので、今後は子どもたちと楽しくのびのびと活動するようになりたいと思った。」と、子どもと共にやる表現の活動をイメージした記述からもわかる。

履修者ABCDは自己評価する時に、実習時の指導担当教員を基準として、それと照らし合わせて自己を評価し、実習を経験していない履修者EFGとは自己を評価する基準が異なっていたと言えよう。ループリックで評価の内容が詳細に示してあれども評価の仕方に差異が見られる結果となった。

(3) 表現を受け取るということ

評価の観点には「表現を受け取る力」または「受容する力」を設けていなかったが、自由記述には、C：「音楽が全員得意なわけではないからその中でも（中略）一緒にリズムを取ったり目を合わせたりすることでみんなで一体となってやれると良いと思いました。」や、本授業で学んだこととして、B：「他の人とコミュニケーションをとる大切さ」が記述されていた。

これらの記述からは、他の人の音を聴き、合わせようとする姿や、授業の中で毎週出会う新たな楽器を演奏しつつ、共に音楽を作り上げようとしたことが読み取ることができた。

表現は、表現者と受容者の両方があってこそ成立すると言えよう。授業の中で、自然と学生間で行われていた、表現を受け取るということ＝「表現を受け取る力」をループリックに加える必要性が明らかとなった。

(4) 楽しさを味わうということ

幼稚園教育要領第2章ねらい及び内容の「表現」の内容(6)には「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」⁸⁾とある。保育をする上で先ず大切なことは、保育者自身が活動自体を楽しむことである。学生の自由記述には、D：「反復練習をすることでピアノを弾くことに段々と慣れてくることを知り、この授業を通して楽しく学ぶことが出来た。（中略）さらに、色々な楽器に触れてみることも非常に大事な事であることを学ぶことが出来た。」やA：「こ

の授業を通して、音楽が持つ力について、気づきました。(中略)最初はできないと感じても、地道に努力をする事で、出来るようになる事もあることです。正直自分はピアノが大の苦手です、楽譜すら読むのが難しかったですが、今はもう読めるようになり、また授業がスタートした時よりも、今の方がスムーズに弾けるようになっています。授業が始まった当初の自分からでは考えられない成長が出来て、とても嬉しいです。」というように、楽器を奏することや、その過程における練習をも楽しむことができていることがわかる。音楽は楽器さえあれば楽しめるものではないが、これらの学生のように音楽の楽しみ方を理解している保育者は保育においても、その楽しさを子どもに伝えることができるであろう。音楽を楽しむためには練習も必要であるが、練習のための練習ではなく、楽器を使って音楽を楽しむための練習を工夫して子どもと共に楽しさを味わうことができるであろう。

本学生たちが味わった楽しさを評価できるように、「楽しさを味わうこと」に関するルーブリックの項目も必要であることが示唆された。

総括と課題

「表現」の保育は、子どもが日常生活の中で表現したくなるような環境をつくることが大前提となる。また、黒川が言うように「その子なりの表し行為として受け止め、その内容でできるかぎり適切に読み取ること」⁹⁾が重要となるので、まずは保育者のその表現を受容する態度が人的環境として最優先となろう。本研究において、ルーブリックの評価の観点には、他の人の表現を受容する態度に関する項目が必要であること。また、音楽に係る技術に偏ることなく、子どもと共に行う活動のイメージを持つことができるような授業展開と共にその評価の観点が求められることが明らかとなった。それには、実習経験の有無にかかわらず自己評価できる評価の観点を加えたルーブリックの作成が必要となろう。

課題として回答者数を多くして再検討すること、保育内容演習「表現」のシラバスの内容の検討が残った。

謝辞

授業に楽しく参加してくれ、研究に協力してくれた履修者の皆さんに感謝します。

引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」(答申)、文部科学省、2008
- 2) 奥千恵子、「保育者養成校におけるピアノ演奏技法の評価(2)」ルーブリックに基づく評価方法の検討、教育研究実践論集、2019
- 3) 北浦恒人、「保育者養成課程における音楽の指導法研究—ルーブリックを活用した「表現創作(作曲)」授業改善方策について—」、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要、2019

- 4) 黒川建一・小林美実 編著, 『保育内容 表現 (第2版)』, 建帛社, 1999
- 5) 黒川建一編著, 『保育内容「表現」』, ミネルヴァ書房, P. 29, 2004
- 6) 前掲書5)
- 7) 文部科学省, 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, P. 234, 2018
- 8) 文部科学省, 『幼稚園教育要領』, 文部科学省, P. 17, 2017
- 9) 前掲書5) P. 29
- 10) 山口陽弘, 「教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案—パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して—」, 群馬大学教育学部紀要, 人文・社会科学編第62巻, 2013

付記

本論文は日本保育学会第77回大会にて発表した内容に加筆・修正したものである。